

エルヴェシウスに対するルソーおよびディドロの 哲学・教育論争について

——フランス啓蒙思想における認識・道徳・能力の諸問題——
(その2)

永 冶 日 出 雄

(教育学教室)

は じ め に

I. エルヴェシウスに対するルソーの批判

1. エルヴェシウスに対するルソーの態度
2. 『《精神論》への覚書』におけるエルヴェシウスへの批判
3. 『フェーブル草稿』におけるエルヴェシウスへの批判
4. 『エミール』におけるエルヴェシウスへの批判
5. 『新エロイズ』におけるエルヴェシウスへの批判

(以上第25輯, 1976年3月)

II. ルソーに対するエルヴェシウスの批判

1. ルソーの『覚書』に対するエルヴェシウスの態度

1772年に公刊されたエルヴェシウスの遺稿『人間論——人間の精神的能力と教育について』は全体で10篇173章から成る大作であるが、その第5篇はルソーへの批判を主題としている。そこでは『エミール』および『新エロイズ』の論述を検討し、ルソーの意見に反論することをおし、エルヴェシウスはすでに『精神論』で展開したみずからの理論を擁護し敷衍する。ところで、『人間論』に含まれるこのような章節は、さきに解明したルソーによるエルヴェシウス批判といかなる関連を有するであろうか。とくに『精神論』への反駁であることを明示する記述が公にされず、『エミール』などにおける主張が唯物論者への一般的な批判として表現されている事情のなかで、エルヴェシウスはルソーからの攻撃をどの程度まで意識したであろうか。『人間論』そのものを考察するにさきだち、私たちはこの問題に関係する若干の資料を検討してみたい。

ルソーがエルヴェシウスへの反駁を綴った草稿を焼き捨て、批判的評言を書き込んだ『精神論』の冊子をもデュタンに譲渡したことは前節で述べた。このような冊子が存在す

ることを耳にして、1771年にエルヴェシウスはデュタンにたいしルソーの書き込みの閲読を申し入れた様子である。しかし、デュタンはルソーとの約束を理由にこれを断り、エルヴェシウスはついに問題の冊子を手にはできなかつた。この間の経緯は8年後に出版されたデュタンの書物『M. D. B. への手紙——《精神論》に対するルソーの反駁について』のなかでつぎのように説明されている。

「いまから12年前のこと、私はロンドンでルソーの蔵書を千冊あまり買い取った。これらの書物のなかには余白にルソーみずからが評言を書き留めた『精神論』の冊子が見出された。私が買い取りの決意を固めたのは主としてこのためである。しかし、ルソーは譲渡に同意するにあたりひとつの条件を付した。すなわち、彼の眼の黒い間は、蔵書に書き込まれたいかなる覚書も公刊はせず、またとくに『精神論』の冊子は私の手元から離さない、との条件である。(中略)エルヴェシウスはこの冊子を私が所有していると聞き、高名なヒュームや他の友人たちを仲介として、これを自分のところまで届けてほしいと希望してきた。けれども、私のほうはルソーとの約束に拘束されており、こうした理由を伝えると、エルヴェシウスも私が慎重な態度を保つことを諒解してくれた³⁾。」

とはいえ、ルソーの評註への関心をエルヴェシウスは失ったわけではなく、あらためてデュタンにその主要な論点を書き送るよう依頼した。こうしたエルヴェシウスの熱意を、ルソーの心酔者であったデュタンは、自己の提起した原理に不安を抱いたためと説明する²⁾。しかし、はたして『精神論』の著者はルソーからの批判を前に焦慮し動揺したであろうか。デュタンにあてた1771年9月22日付の書簡を考察してみよう。

「あなたが結ばれた約束は神聖なものです。ルソー氏の冊子を身から離さないで保管すると申合せたのであれば、私はもはやなにも求めません。ルソー氏が私の著作に記した評註を読めれば嬉しいのですが、そうした私の願いもいまはかなり弱まっています。私は彼の雄弁を高く評価しますが、彼の哲学はあまり評価しません。ポーリングブロック卿が語られたとおり、プラトンは天上から地上へと降り、デモクリトスは地上から天上へと昇りました。後者の歩みこそもっとも確実なものです。(中略)しかしながら、ルソー氏の評註のなかに肝要と思われるものがあれば、私にお伝え頂きますか。長々とした論義を必要としないかぎり、それには反論を書いて送りましょう³⁾。」

この時点におけるエルヴェシウスはすでに『人間論』の執筆を完了し、そこには『エミール』と『新エロイズ』の検討も載せられていた。しかし、彼に対する直接の攻撃を慎んだルソーの配慮のために、これらの書物は『精神論』への批判を検索するうえで、エルヴェシウスを困惑させたと思われる。そして、デュタンへの申し入れの一因は、おそらくこのような部分を確認することであったにちがいない。とはいえ、デュタンが送付した『《精神論》への覚書』の要約は、エルヴェシウスにとって目新しいものではなく、また彼の基本的姿勢を揺がせるものでもなかつた。デュタンは『覚書』の記述を5つの項目にまとめ、これにたいして感覚一元論および素質平等論への攻撃を重視しつつ、エルヴェシウスは簡潔な反論を書き綴った。こうして彼は死出の旅につく30日前にデュタンあて書簡のなかで、遺作となるべき『人間論』こそ自己の原理を明白に立証し、ルソーの批判をも充分に論破するものであると確言する。

「私のところにお送りくださった評註のこと、非常に有難く思っております。あな

たは鋭い感覚をおもちですね。評註の第四および最後では、私の原理に向けて強靱な論駁がなされています。『精神論』の全体構造はこうした問題について詳しく論述する余裕を許しませんでした。いまあなたが指摘される二つの論点に批判の注がれることは、『精神論』を世人に問うたときつとに予想しており、これら二点に関して詳述しうる著作をあらたに立案し素描していたのです。この著作はすでに書きあげられています。しかし、私は激しい迫害に身を晒すことなしに、これを刊行できないでしょう。高等法院を構成するのはもはや僧侶だけとなり、そこではスペインにおけるよりも査問が厳しいのです。巧拙は別として、この著作は論義を呼ぶ数多くの問題を取扱い、それゆえに私の死後にしか陽の目をみないでしょう⁴⁾。」

2. 『人間論』執筆の構想と刊行への経過

なおここで、エルヴェシウスによるルソー批判を綿密に考察する一助として、『人間論』執筆の構想と刊行への経過をめぐり、二三の問題を吟味しておきたい。エルヴェシウスが『精神論』により掲げた思想的立場を、激しい迫害と厳しい批判を浴びつつも最後まで堅持したことは、上記のデュタンあて書簡からも察知できるであろう。この点について『人間論』のなかではより毅然たる態度をもって信念と決意が語られている。1770年に書いたとされる同書の『まえがき』の冒頭でエルヴェシウスはつぎのごとく言明する。

「人間と真理への愛が私にこの書物を作らせた。自己を認識し、道徳について明確な観念をもつならば、人間は幸福かつ有徳となるであろう。私は怪しげな意図から著述したのではない。もしもこの書物を生きている間に出版するならば、私は迫害に晒され、富も地位も新たに獲得することはないであろう。『精神論』のなかで確立した原理をけって放棄しないのは、私の書物が刊行されて以来これこそ聰明な人々が採択しうる唯一の原理だからである。『人間論』ではこうした原理が『精神論』におけるよりもはるかに拡張され深化されている⁵⁾。」

とはいえ、このように同一の思想的立場を貫ぬきつつも、これら二つの書物の間には執筆の意図や論述の中心に関し相当の差異が存在する。すなわち『精神論』にあっては感覚一元論を機軸としながら、利益を善悪の基準とみなす道徳論と精神的素質の平等を唱える能力論が両輪として展開されていた。これに比して『人間論』では素質の平等を論証することが主要な位置を与えられ、功利主義的な道徳の開陳はいわば脇役に置かれている。このようにしてエルヴェシウスの遺作は能力の理論をロック以来の感覚論によってあらためて基礎づけ、さらにそれを政治改革と教育改革の具体的構想へと構築したのである。したがって、『人間論』のなかでは体系的な理論として素質の平等を主張した第2章、政治改革と教育改革を主題とする第9篇ならびに第10篇がとくに重要と思われる。この書物の『序論』を吟味し確認してみよう。

「哲学者が行う研究においては、人間の幸福を増進することが研究の目的とされる。そして、人間の幸福は人々を治める法律の如何、また人々に授ける教育の如何に依存する。こうした法律および教育を改善するためには、あらかじめ人間の心情と精神、それらの様々な作用を認識し、かつまた道徳の科学、政治の科学、教育の科学の進歩を妨げる種々の障害を認識することが前提となる。(中略)人間の精神、徳性および才能を私は自然により造られるものとみなす。この考えは『精神論』で提起したものであり、私には永久の真理と思われる。とはいえ、これはいまだ十分に論証されていない

い。人々はたんに私に賛同して、教育が個人および民族の才能や性格にたいし意外なほど大きな影響を及ぼす、と信じたにすぎない。その程度にしかまだ人々は私を認めていない。こうした意見を検討することが本稿の第一の課題となる。人間を養育し教育し、幸福へと導くために、人間にはいかなる教育といかなる幸福が可能であるかを知る事が肝要である⁶⁾。」

さて、こうした『人間論』の企画と執筆に対してルソーからの批判はどのような影響を与えたであろうか。エルヴェシウスがこの書物の作成に着手したのは『精神論』の出版から程ない時期であり、自己の主張に浴びせられた疑問や非難に反駁するためであった。ディドロによる論評やヴォルテールの忠告はすでに1758年に示されているが、これらと前後して『精神論』にもっとも執拗な攻撃を続けたのは高等法院とジェスイットである⁷⁾。ルソーが公にした間接的批判ははるかに遅れ、『新エロイズ』は1761年に、『エミール』は1762年にはじめて刊行された。それゆえ、『人間論』の当初の構想はこれら二つの著作の検討を含まないものと思われる。エルヴェシウスの生涯に関してもっとも豊富な資料を提供したサン・ランベール (Saint-Lambert) は説明する。

「ヴォレに退いてエルヴェシウスは『精神論』の原理を展開し証明することに専念した。はじめ彼は原理を弁明し、批判に応答することに努めた。しかし、その仕事が終るや、批判は忘れられた。エルヴェシウスはそうした企画を棄て去り、当初の観念を系統づけて、教育の全般的構想を立案することを選んだ。これこそ彼の『人間論』の主題となったのである⁸⁾。」

『人間論』の構成が最初どのようであり、またのちにルソーへの批判がどのように編入されたかについて、いま私たちは確証できる資料を有しない。しかし、『人間論』の第1篇にはルソーが『ポーモンへの手紙』を公刊したことを示す記述があり、1763年以降に『エミール』と『新エロイズ』の検討が追加され、構成に大幅な変更が行われたことを推測させる⁹⁾。そして、死の翌年に刊行されるこの遺作は1769年にはほとんど仕上げられていた。エルヴェシウスが書いた同年4月15日付のルフエブル・ラロッシュ (Lefebre-Laroche) あて書簡はこうした事情について述べている。

「『人間論』の印刷にさいし採るべき態度を考えるうえで、あなたの助言は有益なものとなるでしょう。私はこれが完了することを望んでおり、前半の部分は『精神論』への批判に応答すべく作成したままにしておきます。私は国民が正当な評価をくだし、私の原理に広汎な愛好を示してくれることを知っています¹⁰⁾。」

なお、1772年にガリチンによって出版された初版ならびにこれを収録した最初のエルヴェシウス全集と、ルフエブル・ラロッシュによって編集され、現に定本とされるディドー版全集の『人間論』とは同一ではない。オランダで出された初版は1767年に手渡された原稿に基づいており、ルフエブル・ラロッシュはその後さらに修正され加筆された遺稿を典拠として『人間論』を校閲したのである。かくして初版とディドー版全集の差異は1767年以降の理論の変化を考察するうえで貴重な材料となる。ルフエブル・ラロッシュの説明に注目してみよう。

「『人間論』はエルヴェシウスの死後にはじめて印刷されたが、それは1767年にニュレンブルグのある学者に送られた原稿によるものであった。この人物は『人間論』を翻訳し、まずドイツでは公刊するのがよいと考えていた。古い専制政治が著者に再び

迫害をくわえることを妨ぐため、これが適切な手段とみなされたからである。学者は翻訳を完成する前にこの世を去った。その原稿に基づいてなぞオランダで『人間論』の初版が作られたかはだれも知らない。のちにそれがフランスおよび全ヨーロッパにおける数多くの版に用いられ、偽造者の無知や食欲がもたらす沢山の誤りを付加されている。ドイツへ原稿を送ったあともエルヴェシウスは自己の作品を修正し練磨しつづけた。文章のなかで多くの註があるいは削除され、あるいは挿入された。すべての章があらためて配置されるか、あるいは除去された。エルヴェシウスはこうした状態で私に遺稿を預け、今日それを私は公にするのである²³⁾。」

筆者で分析したかぎりでは、『人間論』の初版とディドロ版全集のそれとの間には、とくに第9篇の後半および第10篇の全体において数多くの大幅な相違が存在する²⁴⁾。まさしくルフェーブル・ラロッシュが示唆したように、1767年以降に『人間論』は政治改革と教育改革を提唱する帰結的部分に入念な修正と加筆を施されたのであった。したがって、これら二つの版の異同を検討することは、エルヴェシウスの理論の発展を把握するうえで興味ふかい課題と思われる。とはいえ、本稿における主たる考察の対象、すなわち『エミール』および『新エロイズ』の吟味を主題とする第5篇、さらにルソーの生活や活動に言及する第1篇第8章のなかにはほとんど相違が見出されない。こうしてエルヴェシウスは必要な個所には大幅な修正を試みる余裕を有しつつ、また短い期間とはいえ『精神論』への覚書』に関する情報をも入手しつつ、ルソー批判にかかわる部分にはさして変更を施していないと言える。そして、このような態度はデュタンあて書簡に示された自己への確信とルソーへの評価にまさしく一致するのである。

3. 『人間論』におけるルソーへの批判 その1——一般的特徴

『人間論』を執筆する最大の目的は精神的素質の平等を論証することであり、そこにおいて『エミール』と『新エロイズ』への反論が展開されたのも、主としてこのような論証を補強するためであった。ルソー批判を主要な課題とする同書の第5篇は、「精神の優劣を感官の精粗に帰する人々の誤謬と矛盾について」と題されている。ここでルソーが狙上に載せられるのは、彼こそいかなる論者よりも「才気と雄弁をもってこの問題を論じたからである²⁵⁾。」エルヴェシウスの説明を吟味してみよう。

「こうした問題についてルソー氏と私とは対蹠的な意見をもっている。私の目的は彼の観念のいくつかを論破することであって、『エミール』を批判することではない。この書物は作者の名を辱かしめず、また世人の評価にも値するものである。しかし、あまりにも忠実にプラトンを模倣し、しばしばルソー氏は雄弁であろうとして、厳密であることを犠牲にしているらしい。自己の観念をより厳格に考察し、相互をより注意ぶかく比較したならば、彼が陥った矛盾はおそらく避けえたであろう。『エミール』の著者の基本的な主張を検討してみると、彼の誤謬のほとんどは下記の原理をあまりにも安易に受入れたため必然的に生じたものである。すなわち、『精神の不平等は感覚器官の精粗からもたらされ、また私たちの才能と徳性はともに体質の相違に左右される』と²⁶⁾。」

第5篇の冒頭に掲げられたこのような問題の提起に関連して、ここで私たちはいくつかの事柄を確認しておきたい。まずエルヴェシウスの見地からすれば、ルソーの論述には二つの難点が認められることである。その第一は能力の問題について原理的な誤りを有す

ることであり、その第二は論理的な齟齬よりも表現上の効果を重んじたことにほかならない。前者の基本的原理に関しては次項において究明を進めることとし、後者に関して言及するならば、こうしたルソーへの見方はたんにエルヴェシウスに限らず、ディドロなど百科全書派に共通したものであったと思われる²⁵⁾。『人間論』のなかでも、ルソーの論理の齟齬性への疑いはさらに各所で述べられている。

「ルソー氏はいつも著作のなかで読者を教化するよりは魅惑することに専念していると思われる。演説するのが常であり、推論するのが稀であって、哲学的な論義においてはときに雄弁が有効とみなされるにしても、すでに真理と認められた意見の重要性を印象づける場合に限られることを彼は忘れていた。たとえばアテネの人々を眠りから覚醒し、フィリップに対して武装させることが必要であったとする。デモステネスは雄弁の力をあらんかぎり発揮すべきであろう。けれども、新しい意見を開陳する場合には、論義によってこれを検討すべきである。ここで雄弁となるのを望む者は道に迷うことになろう²⁶⁾。」

なお、『人間論』におけるルソー批判は主として能力の問題をめぐる、彼の誤謬と矛盾を解明したものであった。エルヴェシウスが『エミール』その他の著作についていかなる全体的評価を有したかは、さきに引用した評言を超えてはほとんど知られない。しかし、彼は『エミール』に関して、価値ある書物だからこそデカルトの作品や『百科全書』と同じく迫害を招いたと述べ²⁷⁾、また『人間論』の第1篇第8章でルソーの文筆活動を下記のごとく素描する。

「ディジョンのアカデミーは弁論の懸賞を募っていた。その課題は奇妙なものであった。すなわち、『学問は社会に対し有益であるよりもむしろ有害であったか』と問うたのである。この問題を論ずるに唯一の効果的な方法は学問に反対する立場を採ることであった。こうした企画に基づいて彼はひとつの弁舌ある論文を作成し、その真価にふさわしく大きな賞讃を獲得した。(中略)ルソーはパリと友人から離れ、モンモランシに引き込んだ。そこで彼は『エミール』を執筆し刊行し、羨望と無知と偽善に追いまわされた。全ヨーロッパでその雄弁を賞讃されながら、フランスでは迫害されることとなった。人々は彼につぎの章句を当てはめた。『居るところでは苛められ、居ないところでは讃えられる。』ついにルソーはスイスに身を隠し、迫害に対してしだいに憤って、パリ大司教にあてた有名な書簡をそこで書いた²⁸⁾。」

4. 『人間論』におけるルソーへの批判 その2——能力の問題をめぐる

ルソーの主張への本格的な批判を開始するにあたって、まずエルヴェシウスは『新エロイーズ』から相互に矛盾した論述を引証する『新エロイーズ』に含まれる教育論はたんに『エミール』の抜粋ではなく、とくに能力の問題は前者においてより入念に論義されている。おそらくそうした理由からエルヴェシウスは主なる対象を『新エロイーズ』の第5篇第3章の手紙に定め、ルソーの能力論を批判したと思われる。しかも彼が最初に矛盾を指摘した個所こそ、まさにルソーが『精神論』への反駁を意図しつつ記した論述であった。この事実は『新エロイーズ』に含まれる自己への批判をエルヴェシウスが察知していたことを物語る。『人間論』第5篇第1章の最初の部分を訳出してみよう。

「ルソー氏のいくつかの観念は簡単に比較しただけでも矛盾しているのが分る。

〈第一の命題〉彼は『新エロイーズ』第5篇第3章の手紙(116頁)でつぎのごと

く言う。『性格を変えるためには、体質を変える必要がある。同様に精神をも変え、愚者を才能ある人物にすることを望むのは、褐色の髪を金色の髪にしたいと望むのに等しい。どうしてさまざまな心情や精神を同じ鋳型で鋳造できよう。私たちの才能・悪徳・徳性、したがってまた性格もまったく肉體組織に依存するのではないか。』《第2命題》彼は『新エロイズ』第5篇(164, 165, 166頁)でつぎのごとく言う。『子どもを原始的な素朴さのなかで育てるならば、実例を眺めることもない悪徳、感受する機会もない情念、吹き込まれる方途もない偏見などが、いったいどこから子どものところへ来るであろう。私たちが自然の罪にするさまざまな欠陥は、自然が造るのではなく、私たちが造る。子どもが口にするふしだらな言葉も、風によって種を運ばれた異国の草木にはかならない。』ここに引用した第一においては、ルソー氏は私たちの悪徳や情念を、したがってまた性格をもたらしものは肉體組織であると信ずる。反対に第二では人々が悪徳なしに誕生することを彼は信ずる。(私もおなじくそう信ずるが。)しかし、それと同一の理由から人々は徳性なしにも誕生するはずである²⁰⁾。

『人間論』でなされた引用は、研究者のひとりスミスも評するとおり、ルソーの叙述の忠実な再現ではなく、むしろ必要な個所の摘記と要約である²⁰⁾。とはいえ、エルヴェシウスの分析は問題の核心を衝いており、『新エロイズ』の矛盾をたんにルソーへの誤解やルソーの文飾から説明することはできない。この矛盾はむしろ能力についての相反する立場、すなわち素質決定論と教育決定論を併用することから生じ、それゆえに教育の意義や役割を論ずる場合にも顕著な論理的混乱を惹起する。エルヴェシウスは『人間論』第5篇第5章でつぎのように論を進める。

「ルソー氏は教育が有益であり、かつ無益であると交互に考える。《第1の命題》ルソー氏は『新エロイズ』の第5篇(109頁)で言う。『教育はあらゆる方面から自然を妨害し、魂の偉大な特性を抹消して、なんら実在のない卑少なものを、現象的なものを代置する。』この事実が認められれば、教育ほど危険な事柄はない。しかし、と私はルソー氏に述べたい。自然が授けたとされる偉大な特性に卑少な特性を代置し、かくして性格を悪に変えるのが教育の力であるとすれば、おなじく自然が授けるであろう卑少な特性に偉大な特性を代置し、かくして性格を善に変えることをなぜ教育の力でできないのか。誕生しつつある共和国の英雄精神はこうした変化の可能なことを立証する。《第2の命題》ルソー氏は同書の第5篇(121頁)でヴォルマールに語らせている。『子どもを従順にしたいと望んだので、私の妻は訓練という制御に代えてより強靱なもの、すなわち必然という制御を続けた。』だが、教育のなかで必然が役立ち、抵抗できない力をもつならば、まさしく人々は子どもの欠陥を矯正し、性格を善に変えうるのである。したがって、これらの命題のひとつにおいてルソー氏は、みずからと矛盾するばかりでなく、経験とも矛盾している²¹⁾。」

もちろんこうした矛盾は消極教育の主張に表わされるとおり、ルソーの独自の論理として一定の齟齬性を有することは確かである²²⁾。けれども、ルソーとエルヴェシウスの対立の根底には看過しえない認識論的な相違が存在する。『《精神論》への覚書』はエルヴェシウスの道徳論や能力論を攻撃するにあたってとくに認識の問題を重視し、またエルヴェシウスもデュタンあて書簡のなかで反批判の大半を感覚論の説明にあてている。しかしながら、このような重要性にもかかわらず、『人間論』にあっては直接にルソーの認識論を批判

した個所はきわめて少ない。おそらくこれは『エミール』に含まれるエルヴェシウスの感覚論への論駁が確認し難いことに関連するであろう。ただし『人間論』の第5篇第2章ではルソーの二元論への批判を含みつつ、認論に関する自己の理論が略述され、両者の原理的な相違が明らかにされる。

「人間において精神とはなにか。人間が有する観念の集積である。それではどんな種類の精神が才能と名付けられるか。ひとつの分野に集中した精神、すなわちひとつの分野での観念の大きな集積である。生得観念が存在しないならば（ルソー氏も著作のいくつかの個所でこれを肯定する）、精神と才能は習得されるものである。すでに述べたように、精神も才能もつぎのものを生成の原理としてもつ。①肉体的感性。これなしに私たちは感覚を受入れることができない。②記憶、すなわち受入れた感覚を想起する能力である。③利益。これを有するがゆえに私たちは感覚を相互に比較し、さまざまな事物のもつ類似と相違、適切と不適とを注意ぶかく観察するにいたる。（原註）すなわち利益こそ注意を喚起するのであり、人間が同様な肉体組織をもつ以上は、精神を生成する共通の原理なのである。したがって、才能は一定の分野への特殊な素質から生れるとよく説明されるにもかかわらず、実際には一定の分野の観念に注意が集中された結果にすぎない。〈原註〉『判断することは感覚することではない。』とルソー氏は言う。こうした意見の証明として、私たちのなかには事物を比較する力あるいは能力が存在し、この力は肉体的感性の結果ではないとされる。もしもルソー氏がこの問題をより深く究明すれば、こうした力は利益にはかならぬことを認めるであろう。利益こそ私たちをして事物相互の比較へと導くものであり、また自己愛という感情にみずからの源泉をもつのである。まさしく肉体的感性から直接に生みだされると言える²³⁾。」

5. 『人間論』におけるルソーへの批判 その3——道徳の問題をめぐる

エルヴェシウスの著作において論究される精神的能力とはたんに知性的なものにとどまらず、道徳的なものをも含んでいる。しかし、『精神論』が道徳の問題を能力の問題からあらためて区分し、別個に検討したとおり、道徳の本質や道徳性の育成についての究明は独自の論点を有している。『精神論』およびこれに対するルソーの批判の構造を踏まえつつ、本稿も道徳の問題をめぐるなお詳細に検討を続けよう。

道徳の本質に関連したルソーとエルヴェシウスの対立にあって、まず論義を呼ぶのは生得観念への態度である。精神の優劣に関する『新エロイズ』の矛盾をまず指摘した『人間論』の第5篇第1章は、とくに道徳の分野について『エミール』を引証し、下記のようにルソーの撞着を追及する。

「〈第3の命題〉ルソー氏は『エミール』の第3篇（63頁）で言う。『正義の感情は人間の心情において生得的である』同じ篇（107頁）でも彼は繰返す。『魂の奥底には、徳と正義の生得的な原理が存在する。』〈第4の命題〉彼は『エミール』の第3篇で述べる。『徳の内的な声は貧者には聞えない。』同書の第4篇（161頁）でも彼は重ねて言う。『人民は美しいことや正しいことについての観念をほとんどもたない。』そして、同書の第3篇で結論する『理性の年令より以前には人間は認識なしに善や悪を行っている。』これらの命題のうち第3では生得的な徳の社会をルソーは信じており、第4では習得されるものと信じている。ルソーは後者においてのみ正しい²⁴⁾。」

生得観念の検討はルソーやエルヴェンシウスばかりでなく、啓蒙思想の重要な課題に教えられる。ロックは『人間語性論』の第1篇を生得観念に関する論究に充て、コンディヤックやディドロもこれについて様々な考察を試みている。そして、こうした人々の批判はしばしば十七世紀の形而上学者に向けられるとしても、究極においてはトマス・アクィナスに代表される中世的な人間観に挑戦するものであった。啓蒙思想、とくに唯物論の傾向をもつ人々はキリスト教的な道徳に代えて現世的で経験的な道徳を確立することをめざしている²⁶⁾。功利主義を体系化したエルヴェンシウスの『精神論』が執筆され、『サヴォア人司祭の信仰告白』が功利主義への非難を含むのもこうした系譜に照らして理解することが必要であろう。彼みずからに向けられたと思われるルソーの論述に応ずるかのようエルヴェンシウスは説明する。

「ルソー氏は『エミール』の第3巻(109頁)で言う。『徳の生得的な観念がないならば、ときに認められるように、正義の人や正しい市民はなぜ自己を犠牲にしてまで公の利益に尽すのか。』私は答えたい。『なにびとも自己を犠牲にして公の利益に尽すのではない。栄誉を冠に戴くため、公の尊敬に値するため、そして祖国を隷従から解放するため、みずからの生命を危険に晒す英雄的な市民は、自己にもっとも快い感情に耽溺するのである。徳の実践のなかに、公の尊敬とこれと結びついた快楽の獲得のなかに、彼が幸福を見出すとなぜ言えないのか。なおまた水夫や兵士が海上とか塹壕でつねに1エキューのために身を晒しているのに、祖国のためみずからの生命を犠牲にすることが、いかなる理由によってありえないのか。したがって自己を犠牲にして公の利益に尽してゐるかにみえる正しい人間は、高貴な利益という感情に服従するにすぎない。なぜここでルソー氏は利益こそ人間の唯一にして普遍的な動因であることを否定するのか²⁶⁾。』

英雄的精神や愛国的行為を功利主義の原理から直線的に解説するエルヴェンシウスの論述は十分に説得的とは言えないであろう。しかし、生得観念を肯定するルソーの側がはるかに根本的な誤りを犯していることは確かである。こうしたルソーの観念論的な誤謬は道徳的な実践や道徳性の育成をより具体的に論ずるについて、いっそう顕著なものとなり、様々の撞着を派生させる。まさしくエルヴェンシウスはルソーの道徳論の基本的な矛盾、すなわち観念論的な原理と実践的な課題との矛盾を抽出している²⁷⁾。人類愛の育成を教える『エミール』の有名な個所に関連しつつ彼は論評する。

「『エミール』の第1巻(179頁)でルソーは言う。『苦しみを知らぬ人間はみな人類のもつ憐憫の気持も同情から漂う甘美な薫りも知らない。そうした人間の心情はなにごとにも感動しない。彼は社会的ではなく、同胞に対して怪物であるにすぎない。』同書の第2巻(220頁)で彼は重ねて語る。『次の格律ほど美しく正しい言葉を私は知らない。すなわち、自分の身にも降りかかると思わないかぎり、だれも他人の不幸を憐れみはしない。これこそ君主が臣下に対して同情がなく、富者が貧者に対して冷酷であり、貴族が平民に対して傲慢である理由と言える。(中略)かくして私は同情が道徳的感覚でも生得的な感情でもなく、純粋に自己愛の結果であることを論証した。ここからなにが結論されるか。この自己愛こそ人々に授けられる様々な教育や偶然により与えられる環境や立場に従って私たちが情深くも冷酷にもするのである。なにびと

も生れながらに同情の気持をもつのではなく、法律や政治形態や教育の作用によってそうなるのである²⁸⁾。』

6. 『人間論』におけるルソーへの批判 その4——その他の問題に関連して

エルヴェシウスによるルソーへの批判は以上の論点に尽きるわけではなく、人間の成長や歴史の進歩などなおいくつかの重要な問題を含んでいる。いまそれらについて詳細に論述する余裕をもたないが、ルソーの著作に現れる消極教育の提唱や原始生活の讚美に対し、エルヴェシウスが批判的であることは、教育決定論の論理に鑑み首肯しうるのであろう。しかし、ここではルソーの教育理論の評価に関連して、若干を補足しておく。

『人間論』における批判が『エミール』への全体的な評定ではなく、この書物そのものはエルヴェシウスによって高く賞讃されたことは、さきに引用した文章から理解できる。けれども、彼がルソーの著作のどのような部分を積極的に評価し、自己の理論の形成にどのような示唆を受けたかはあまり明確ではない。ただしエルヴェシウスは『人間論』の第5篇第6章を「ルソー氏の観念のいくつかは公教育のなかで立派に活用できる」と題し、『エミール』や『新エロイズ』での提言を撰取するよう勧めている。

「私教育においては教師の選択ができない。すぐれた教師は稀である。それは高価であって、十分な報酬を出せるほど裕かな個人は少い。公教育においては異ってくる。教師に関して政府が十分な報酬を払い、一定の敬意を示し、名誉ある地位とみなすと仮定しよう。このときには教師が一般から望まれるものとなる。(中略) ルソー氏によって提議された教育計画にあって、教師はまずなげに配慮すべきか。子どもの世話をする召使の教育に配慮すべきである。こうした召使を教育したのち、はじめて教師は自己および先人の経験に従い、教育方法の改善に専念できる。これらの教師が一般の利益にもっとも合致した趣味・観念・情念を生徒に鼓吹するよう任されたと仮定する。彼らは生徒の前で自己の物腰や行動や談話について長くは保ち難い注意を払うべく余儀なくされる。こうした拘束に耐えることは日に4時間か5時間が限度である。だから『エミール』や『新エロイズ』で開陳された若干の見解や観念を活用できるのは、教師が順次に交代できるコレージュしかない²⁹⁾。」

教育史家カミングが提起するように、ルソーおよびエルヴェシウスの教育理論に関し、相互の間の対立あるいは特殊性を理解するとともに、これらの類似あるいは共通性を解明することもまた重要である³⁰⁾。ルソーの著作のなかにエルヴェシウスが積極的に評価した個所を検討することは、両者の共通性を解明するため役立つにちがいない。もちろん全体の構造や前後の脈絡を離れて、個々の提言を撰取する仕方が、『エミール』や『新エロイズ』の意義を真に把握することになるかは疑問である。この点はさておき、『人間論』の第10篇第7章には道徳性の育成をめぐるルソーの着想について肯定的な評価が述べられている。『エミール』における情念の指導、とくに賞罰の扱いについては、功利主義の見地から厳しい批判を寄せているが、ルソーが提案した所有権の学習にはエルヴェシウスは賞讃の言葉を記している。

「社会的な徳の必要すらも子どものときから感得させよう。正義の原理を記憶に深く刻むことを望んだとしよう。この目的のため私は学校のなかに裁判を設置し、子どもみずからに紛争を審かせるようにしたい。この小さな裁判の判決は教師の前に提出されて、正当であれば承認され、不当であれば是正される。(中略) この方法により生

徒は正義に関連する教えに注目する習慣を身につけ、やがて正義の明確な観念を獲得するにいたる。これこそルソー氏が所有の最初の観念をエミールに植えつけるのとはほとんど同じ方法である。しかしながら、人々はこうした方法を疎略にしている。たとえルソー氏がこの試行だけを提案したと仮定しても、私は人類の恩人に彼を教え、彼が望むならば、喜んで銅像を建立するであろう²³⁾。」

かくして私たちはルソーとエルヴェシウスの間に交わされた批判および反批判の骨格を解明した。このふたりの思想家がたがいに相違と対決を自覚していたことは確実であり、また実際に彼らの認識論、道徳論および能力論には重大な論理的対立が存在する。アメリカの研究者ホロヴィッツはルソーならびにエルヴェシウスはともに一面の真理を主張しており、両者の矛盾は弁証法的唯物論によってのみ止揚しようと説く²⁴⁾。しかし、私たちはそのような結論をしばらく保留し、今回はディドロが遺した総括的な批判に眼を向け、啓蒙思想の内部においてルソーとエルヴェシウスの対立を克服することがいかに探究されたかを検討してみよう。

〔註〕

- 1) L. Dutens, *Lettres à M. D., B., sur la Réfutation du Livre de l'Esprit d'Helvétius*, par J. J. Rousseau. Suivies de deux lettres d'Helvétius sur le même sujet.
このデュタンの小品は下記のルソー全集に付録として収録されている。本稿はこれに依拠した。
J. J. Rousseau, *Oeuvres complètes*, Paris. 1793. Tome 37. p. 80 《Bélin》
- 2) *Ibid.*, (J. J. Rousseau, *Oeuvres complètes*, Tome 37. p.p. 80 ~ 81, 100.)
- 3) C. A. Helvétius, *Lettre première*. (J. J. Rousseau, *Oeuvres complètes*. Tome 37. p.p. 102 ~ 103)
デュタン著「M. D. B. への手紙」に付せられたエルヴェシウスの二つの書簡は、定評ある彼の全集、ディドー版ならびにルプティ版にも載せられていない。しかし、実証的な研究者であるカーンヤスマスもこの書簡の真憑性については、疑問をもたないようである。
cf. A. Keim, *Helvétius, sa Vie et son Oeuvres*, Paris. 1907. p.p. 465 ~ 466.
- 4) Helvétius, *Lettre deuxième*. (J. J. Rousseau, *Oeuvres complètes*. Tome 37. p.p. 104 ~ 105)
なお、グリムの『文芸通信』は1772年にヴォルテール宛のものとして、この書簡を記載している。しかし、デュタンが公表する7年も前に、なぜ宛先を変えて、これが報ぜられたかは明らかでない。
cf. F. M. Grimm, *Correspondance littéraire philosophique et critique*. Paris. 1882. Tome 10. p. 904.
- 5) Helvétius, *De l'Homme, de ses Facultés intellectuelles et de son Education*. Préface. (*Oeuvres complètes*, Paris, 1795. Tome 7. p.p. vii ~ viii 《Didot》)
- 6) Helvétius, *De l'Homme*. Introduction. (*Oeuvres complètes*. Tome 7. p.p. 2 ~ 4)
- 7) D. W. Smith, *Helvétius, a Study in Persecution*, Oxford, 1965, p.p. 35, 62 ~ 65.
- 8) J. F. Saint-Lambert, *Essai sur la Vie et les Ouvrages d'Helvétius*. (*Helvétius, Oeuvres complètes*, Tome 1. p.p. 118 ~ 119.)
- 9) ディドロは『人間論』の執筆には15年の歳月が費されたと述べている。これは『精神論』の出版のときから死の直前までを意味するであろう。
D. Diderot, *Réfutation suivi de l'Ouvrage d'Helvétius intitulé, L'Homme*. (*Oeuvres complètes*, Paris, 1971, Tome 11. p. 532 《Le Club Francais du Livre》)
- 10) Helvétius, *Lettres*. (*Oeuvres complètes*, Tome 14. p. 97)
- 11) P. L. Lefebvre-Laroche, *Avertissement*. (*Helvétius, Oeuvres complètes*. Tome 1. p.p. vii ~ viii)
- 12) 照合にあたって筆者が使用したのは、初版と同じ草稿にもとづくつぎの諸版である。

Helvétius, De l'Homme, Londres, 1773. Tome 1~2.

Helvétius, Oeuvres complètes, Liege, 1774. Tome 3~4.

なお、日本で抄訳された『人間論』の原本は、ルフェーブル・ラロシュの校閲による版ではないことを付記しておく。

cf. エルヴェシウス著 根岸国孝訳 人間論, 明治図書 1966年.

- 13) Helvétius, De l'Homme. Section IV. Chapitre 24. (Oeuvres complètes. Tome 9. p. p. 79~80)
- 14) Helvétius, De l'Homme. Section V. (Oeuvres complètes. Tome 9. p. p. 121~122)
- 15) ディドロは書いている。「エルヴェシウスは筆を執ると誠実になるが、ルソーは筆を置くとはじめて誠実になる。彼こそ自分の詭弁にまっさきに欺されている。」Diderot. op. cit.. (Oeuvres complètes. Tome 11. p. 506)
また、グリムの『文芸通信』にも下記のような論評からみられる。「一般的に言うならば、ルソー氏の教育論は、真と偽との累積、矛盾の累積であり、偉大で崇高な美観と平凡で無益な唐突とを、感動すべき事柄と爽りのない事柄とを、そしてまた正当な見解と突飛で馬鹿げた体系とを寄せ集めたものである。」F. M. Grimm, op. cit.. Tome 3. p. 190.
- 16) Helvétius, De l'Homme. Section 1. Chapitre 8. (Oeuvres complètes. Tome 7. p. p. 127~128)
- 17) Helvétius, De l'Homme. Section 4. Chapitre 20. (Oeuvres complètes. Tome 9. p. p. 113~114)
- 18) Helvétius, De l'Homme. Section 1. Chapitre 8. (Oeuvres complètes. Tome 7. p. p. 58~60)
- 19) Helvétius, De l'Homme. Section 5. Chapitre 1. (Oeuvres complètes. Tome 7. p. p. 123~125)
- 20) Smith, op. cit.. p. 174.
- 21) Helvétius, De l'Homme. Section 5. Chapitre 5. (Oeuvres complètes, Tome 7. p. p. 159~161)
- 22) グロスマンはたとえばつぎのとおり指摘する。「20才になったエミールが教育の結果として、適確な判断と推論を身につけた様子が画かれる。ルソーは矛盾しているではないか。だが、ここでも彼の論点をエルヴェシウスは誤解している。教育という言葉がルソーは消極教育の意味に用いたのである。」M. Grossman, Philosophy of Helvétius. New York. 1926. p. 158.
- 23) Helvétius, De l'Homme. Section 5. Chapitre 2. (Oeuvres complètes. Tome 7. p. p. 131~132, 223)
- 24) Helvétius, De l'Homme. Section 5. Chapitre 1. (Oeuvres complètes. Tome 7. p. p. 126~127)
- 25) 生得観念をめぐる中世思想と啓蒙思想の対決については、つぎの論文を参照して頂きたい。
拙稿、フランス近代思想における人間の素質と能力 (佐藤英一郎ほか、フランス教育史Ⅱ《世界教育史大系》、講談社、1975年所収)
- 26) Helvétius, De l'Homme. Section 5. Chapitre 1. (Oeuvres complètes. Tome 7. p. p. 128~129)
- 27) 「エルヴェシウスはルソーの表現が矛盾しているのを発見した最初の人々に属する。彼はルソーの行う多くの観察が陳腐で誤った原理に撞着すると考える。」I. Cumming, Helvétius, his Life and Place in the History of educational Thought. London, 1955. p. 193.
- 28) Helvétius, De l'Homme. Section 5. Chapitre 3. (Oeuvres complètes. Tome 7. p. p. 147~149)
さきに言及したエルヴェシウスの引用の仕方については、ここで訳出した『人間論』の文章と逐語訳による『エミール』の該当箇所を比較されたい。たとえば、
ルソー著 長尾・原・桑原・永治訳、エミール、明治図書、1968年、第2巻32~33頁。
- 29) Helvétius, De l'Homme, Section 5. Chapitre 6. (Oeuvres complètes. Tome 7. p. p. 170~172)
- 30) I. Cumming, op. cit., p. p. 193.
- 31) Helvétius, De l'Homme, Section 10. Chapitre 7. (Oeuvres complètes. Tome 12. p. p. 167~168)
- 32) I. L. Horowitz, Claude Helvétius, Philosopher of Democracy and Enlightenment, New York, 1954. p. 153.

ホロヴッツの著作は平等に関する論議を歴史的状況や社会的背景との関連で追究しているが、政治的・経済的な平等と精神的素質の平等の間にみられる区別と関連を明確に論じていないように思われる。

(昭和51年9月1日受理)

エルヴェシウスに対するルソーおよびディドロの
哲学・教育論争について

——フランス啓蒙思想における認識・道徳・能力の諸問題——
(その2)

永 冶 日 出 雄

愛知教育大学研究報告 第26輯 (教育科学) pp.27~38 [別刷]

1977年3月1日

Reprinted from

The Bulletin of Aichi University of Education

Vol. XXV (Education Science) pp.27~38

Kariya, Japan

March 1, 1977